わたしの学級経営

～大切にしていること～

芽室町立芽室小学校
教諭　山田　聡

思いを過不足なく伝えることができる学級通信。

■はじめに

うまくいったりいかなかったり、そんな14年の教師生活。執筆依頼に動揺しながらも、せっかく頂いたお話なので、楽しく書いていきます。

この「わたしの学級経営」も含め、たまに読む他の先生方の実践を見ては、「すごいなあ」「自分はできていないなあ」「やってみよう！」と手を出してみるも、なかなか続きません。飽き性というのもあるけれど、たぶん、自分が楽しめていないからかもしれません。そんな私が楽しんで続けていることの1つが、学級通信です。

■私の学級通信の書き方

⑴　頻度

私は学級通信を書くのが好きで、比較的たくさん出します。（「え～」という声が聞こえてきました。）低学年担任の際に、「毎日出してみよう！」と2年間やってみましたが、義務に似た気持ちが生じたので、週2～3回が自分にとって、丁度良く感じています。

⑵　内容・分量

内容は、日々の学習の様子から、なんでもない休み時間の様子まで様々です。文字が多いと読んでもらえないので、A4片面300字程度で半分以上は写真にしています。ただ、国語や道徳など、子どもたちの考えを載せるときには文字だらけになってしまうこともあります。

⑶　写真

写真はスペースを埋めてくれる、最高の相棒です。発表や交流など、動きのある活動はよい表情が撮れるのでおすすめです。ちなみに私は、写真に手書きで名前を入れているのですが、クラスメートの名前が覚えられると好評です。子どもも喜んでくれるので、ぜひお試しください。

■おすすめポイント

⑴　保護者との橋渡しになる

通信を読んでいない保護者もいるかもしれませんが、今まで通信を多く出して保護者から悪く言われたことはなかったので、子どもたちの様子をこまめに伝えることができるコストパフォーマンスのよい手段だと個人的に感じています。

⑵　伝えたいことを伝えられる

配付の際、子どもたちに向けて私が声に出して読んだり、自分で読んでもらったりしています。口下手な私の思いを過不足なく伝えることができます。学級でトラブルなどがあったときは、全体に伝えたい内容を、伝えてもよい範囲で話題として取り上げることで、道徳の教材にもなります。

⑶　記録として活用できる

通信は記録として残るので、振り返りや評価にも活用することができます。日々、子どもの取組をメモできれ

ばよいのですが、なかなかその細やかさと余裕がないことが課題です。そんな私にとって、通信に書かれた子どもたちの記録は、特に学期末に頼りになります。また、振り返りのときに子どもたちに改めて見せると、その記憶がよみがえるようで喜びます。

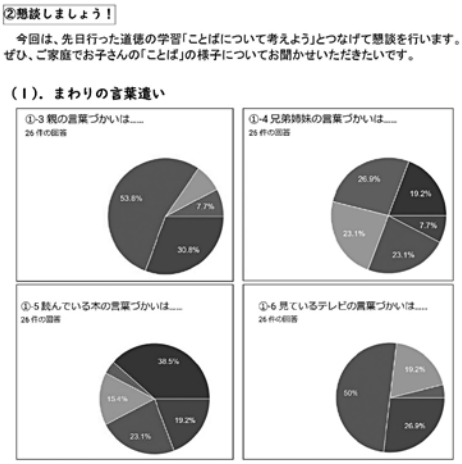
■保護者と同志でありたい

報道を見ていると、教員の志望者が減っているようで、とても寂しいような、しかし納得もできてしまうようなこの頃です。志望者が減る理由の一つに、保護者対応が挙げられていました。私自身、保護者とうまく関係を築けず、またその子どもともうまく関係を築けなかった経験が多々あります。先生方の中でも、「保護者対応？まかせろ！」という方はきっと多くないのではないでしょうか。

私が学級通信以外で、保護者との関わりを楽しんでいることは、「学級懇談会」です。

日々の取組等をこちらから一方的に話し続け、終わった後はとてつもない疲労感や徒労感に襲われる、という経験はありませんか。そんな懇談会を繰り返すうちに、「これは懇談ではないな」と思うようになりました。

最近は事前にテーマを募り、参加保護者全員に話してもらうようにしています。こちらから学習内容や最近の様子とつなげて提示することもあります。保護者全員の話を聞くと、子どもの家での様子が思い浮かんで、とても興味深いです。



「タブレット・ゲームとの付き合い方」「家での勉強場所」「家庭での性教育」など、正直その場で答えは出ないことがほとんどですが、新たな気付きがあるのも確かです。

最近の風潮でしょうか、学校・教員と保護者の関係は、なんだか向かい合って対立しているようなイメージがあります。本当は、対立するのではなく、子どものよりよい成長という同じ目的を持つ同志のはずです。教員は、「学級・学校のすべての子ども」のよりよい成長のために実践していることを、保護者に向けて発信していく必要があると思っています。

■得意・好きを生かしたい

ここまで、私の学級通信や懇談会について紹介をしてきましたが、取り組みたくなってきましたか？（「イヤイヤ」という声が聞こえてきました。）確かに、これらが先生方全員におすすめできるかというとそうではなく、「通信は週1回でもうんざり…」「懇談はない方が…」という方の思いもよく分かります。例えば私が保護者と連携をとるために、「たくさん電話をしよう！」と決めてやったとしても、たぶん続きません。電話だと顔が見えなくて、苦手だからです。

それぞれが「得意・好き」を生かしたやり方で取り組んでいくことが大切なのではないでしょうか。

■私たちのゆとりが、子どもの笑顔に

働き方改革が叫ばれるほど、多忙を極める教員という仕事。今すぐ制度や仕組みを変えることは難しい現状で、できることは限られています。

それは、費用対効果の少ないと思う仕事を思い切って切り捨て、ゆとりを生み出し、「得意・好き」を生かして仕事にあたることではないでしょうか。我々自身を大切にすることが、子どもたちを大切にすること、そしてよりよい成長につながるはずです。

ゆとりを生み出し、自分の「得意・好き」を生かす。